

2年生古文(「古典」)授業における自己評価より

国語科 荻原 万紀子・高橋 初穂・吉野 瑠璃子

はじめに

国語総合を含む現代文領域において、生徒による自己評価を何年か行ってきた。生徒の教材に対する目的意識を高めることを第一の目標として、提出されたものは集計、プリント配布してきたが、その分析は棚上げにしてきた。今回、昨年度から大学院副専攻「探究力・活用力養成型教師教育プログラム」に参加した高橋が集計およびコメントの打ち込みを担当し、その分析を行うこととした。一年目(「国語総合」現代文領域)はクラスの雰囲気や成績傾向との相関が多少見えるようなところで分析で終わったため、二年目の今年度、荻原の担当は2年生古文であったが、初めての導入を試みた。副専攻の報告段階(2月)では、関心と学習成績における相関は見られないことで終わったが、その後、吉野を加えて分析を続けた。今回は、そこから見られたいくつかのことについて報告したい。

年間計画

本校古典は、高大連携国語の目標のもと、歴史の推移にもとづく体系的な理解を得るために時系列に沿って行われている。また、学年ごとにテーマを設定して教材を選んでおり、2年生のテーマは「女性・人生」である。女子校ならではのテーマ設定であるが、女性だけに偏しないように、人生を考えさせるもの万般を扱うようにしている。そのため教科書には掲載されていない作品を扱うことも多い(斜字はプリント教材)。

1学期

古事記 沙本毗古と沙本毗売

万葉集

伊勢物語 筒井筒・梓弓

蜻蛉日記 嘆きつつ

枕草子 中納言参りたまひて 付. 敬語の学習

すさまじきもの(教育実習生による)

香炉峰の雪(同上)

2学期

源氏物語 桐壺(同上)

若紫

更級日記 門出

源氏の五十四卷

堤中納言物語 虫めづる姫君

平家物語 忠度の都落ち

3学期

徒然草 あだし野の露 (第七段)
羅の表紙は (第八二段)
花は盛りに (第一三七段)
奥の細道 漂泊の思ひ
平泉
立石寺
雨月物語 吉備津の釜

自己評価

現代文においては、教材の特質によって目標項目の設定が変わるが、古文においては統一することとした。最終回「雨月物語」のものを次に掲げる。

項目③「文法」を「敬語」に限定することがあったほか、自由記述欄の内容を指定することもあった。自由記述欄は、生徒が自由に感想を書き、これに荻原が簡単なコメントを入れて返却するほか、高橋が入力、荻原が内容に応じて分類したものをプリントにして全員に配布した。これにより毎回、事後の鑑賞が深まっていたと感じているが、この部分は数値化できていない。

二年生古典（古文） 自己評価 12 二年 組 番 氏名
雨月物語

目標→評価項目

- ① 学習習慣 予習課題を八割以上することができた。
- ② 関心 教材の内容に関心を持つことができた。
- ③ 文法 授業中に扱われた文法について理解することができた。
- ④ 語彙 重要な古文単語の意味を理解することができた。
- ⑤ 読解 人物関係・物語の展開を理解することができた。
- ⑥ 鑑賞 『雨月物語』（の一部）を味わうことができた。
- ⑦ 文学史 上田秋成と読本について文学史的なことをおおよそ理解することができた。

自己評価

	おおむね達成	まあまあ達成	あまり達成できず	ほとんど達成できず
①	A _____	B _____	C _____	D _____
②	A _____	B _____	C _____	D _____
③	A _____	B _____	C _____	D _____

- ④ A _____ B _____ C _____ D
 ⑤ A _____ B _____ C _____ D
 ⑥ A _____ B _____ C _____ D
 ⑦ A _____ B _____ C _____ D

自由記述欄（書きたいことがあったらどうぞ。怖い話の創作はやめてください。）

（もとは縦書き）

自己評価分析結果

今回は、学習成績と、主だった自己評価項目（学習習慣・関心・文法）との関係を調べてみた。結論から述べると、大きな特徴は見られない。本来生徒の取組み意識を高めるために行ったもので、仮説にもとづく調査ではないから当然の結果とも言える。ただ、若干読み取れることはあり、以下にそれを示す。

なお、全生徒数は1学期までが119名、2学期以降は121名である。提出していない生徒は各回0～5名程度である。

（凡例）

	高い（ α ）	低い（ β ）	
学習習慣	11～15 26人	24以上 17人	（A = 1、 B = 2、 C = 3、 D = 4 に置き換え。 左数字はその 合計）
関心	12 23人	18以上 15人	
文法	12～13 23人	23以上 11人	
鑑賞	12～13 17人	19以上 26人	

テストの得点 (年間300点満点換算 して平均得点)	高い（I） 260点以上	やや高い（II） 220～259点	やや低い（III） 170～219点	低い（IV） 170点以下
----------------------------------	-----------------	----------------------	-----------------------	------------------

自己評価	テスト				
		高い（I）	やや高い（II）	やや低い（III）	低い（IV）
	高い（ α ）	α I	α II	α III	α IV
低い（ β ）	β I	β II	β III	β IV	

各自己評価項目と成績との関係を下に示す。おおよその傾向として、関心や鑑賞よりも学習習慣・文法との相関が高いことが見える。

人数

	学習習慣	関心	文法	鑑賞
α I	7	4	4	4
α II	10	11	11	6
α III	7	7	7	8
α IV	3	1	0	1
β I	0	1	0	2
β II	8	8	4	14
β III	2	3	3	6
β IV	2	3	4	4

次に、それぞれの自己評価項目と学習成績のクロス集計を試みた。

まず、学習習慣・関心と成績との関係を見てみる。今年度2年生は授業中の関心が高く、取組みも熱心であった。だが、調査結果は次の通りであった。

学習習慣・関心・成績

	I	II	III	IV
学習習慣 α 、関心 α	2	2	2	1
学習習慣 α 、関心 β	0	0	1	1
学習習慣 β 、関心 α	0	2	1	0
学習習慣 β 、関心 β	0	3	0	1

全体的に数字が少なく大きな傾向は見られないが、学習習慣・関心のみで集計しても成績にバラツキがあるので、成績はこれ以外の要因で決まっているらしい。では関心ではなく鑑賞の場合はどうか。

学習習慣・鑑賞・成績

	I	II	III	IV
学習習慣 α 、鑑賞 α	2	1	1	0
学習習慣 α 、鑑賞 β	0	2	2	1
学習習慣 β 、鑑賞 α	0	0	2	0
学習習慣 β 、鑑賞 β	0	4	0	1

ここでも同様に、学習習慣、鑑賞のみで集計しても成績にバラツキがあるので、やはり成績はこれ以外の要因で決まっているらしい。関心や鑑賞は知識や理解とは直結せず別の次元の尺度であるとも言えそうだ。

では、知識や理解に直接結びつきそうな文法を見るとどうか。

学習習慣・文法・成績

	I	II	III	IV
学習習慣 α 、文法 α	2	3	1	0
学習習慣 α 、文法 β	0	0	0	0
学習習慣 β 、文法 α	0	0	1	0
学習習慣 β 、文法 β	0	3	0	1

これを見ると、

- ・習慣・文法の自己評価がともに高い生徒は成績が良好な傾向がある。
 - ・習慣・文法の自己評価どちらか一方が優秀でもう片方が低い生徒はほとんどいない。
- ということは言えそうである。では、関心と文法のクロスはどうか。

関心・文法・成績

	I	II	III	IV
関心 α 、文法 α	1	4	2	0
関心 α 、文法 β	0	0	1	0
関心 β 、文法 α	0	0	1	0
関心 β 、文法 β	0	2	1	2

- ・関心・文法ともに自己評価が高い生徒は成績が良好である。
 - ・関心・文法ともに低いと成績も低い傾向がある。
 - ・関心・文法のどちらか一方が高く、もう片方が低い生徒はほとんどいない。
- という傾向があることがわかる。しかし、文法の代わりに鑑賞で見ると、

関心・鑑賞・成績

	I	II	III	IV
関心 α 、鑑賞 α	1	2	3	0
関心 α 、鑑賞 β	0	1	2	0
関心 β 、鑑賞 α	0	0	0	0
関心 β 、鑑賞 β	1	6	2	3

関心、鑑賞のみで集計しても成績にバラツキがあるので、やはり相関性は見られなくなる。ところが関心ではなく文法でクロスすると、

文法・鑑賞・成績

	I	II	III	IV
文法 α 、鑑賞 α	3	4	2	0
文法 α 、鑑賞 β	0	0	0	0
文法 β 、鑑賞 α	0	0	1	0
文法 β 、鑑賞 β	0	2	2	3

- ・ 文法・鑑賞ともに自己評価が高いと成績が良好である。
- ・ 文法・鑑賞ともに低いと成績も低い。
- ・ 文法・鑑賞のどちらか一方が自己評価が高く、かつもう片方が低い生徒は殆どいない。という傾向が見られる。

関心や鑑賞は成績に直結はしないが、なんらかの働きをしているのかもしれない。

おわりに

以上の調査から成績との関係が比較的明らかなのは文法であろう。ただし文法だけで決まらない要素がある。文法についての自己評価が高く、かつその他に高い評価をつけた項目がある生徒は、成績が良好な傾向がある。その項目は学習習慣に限らず、なんらかの項目での自己評価の高さということのようだ。

<自己評価と成績の関係>…なんらかの項目に α または β がある人数

	I	II	III	IV
α	10	26	8	4
β	2	20	9	6

自己評価が高い（自己評価を低くつけない）生徒は成績も良好な傾向があるという面がうかがえ、本自己評価が生徒の学習意識となんらかの結びつきの要素を持っていると言えそうではある。よって、今後の生徒の指導としては、文法の予習復習を中心とした学習習慣と、個々の生徒が重点的に学びたい項目を意識づけすることが必要であると言えよう。

また、前述したように自己評価配布後のさらなる評価は行っていない。この部分を反映できると新たな面が見えてくるかもしれない。

附記

本報告は、高橋・吉野・荻原の共同調査であるが、クロス集計にあたっては東京工業大学工学部高分子工学科3年生岩崎真皓氏の協力を得ている。